

Title	シュテファン・ゲオルゲ研究 : 伝記(4)
Author(s)	八木, 浩
Citation	大阪外国語大学学報. 13 p.73-p.94
Issue Date	1963-03-20
oaire:version	VoR
URL	<a href="https://hdl.handle.net/11094/80217">https://hdl.handle.net/11094/80217</a>
rights	
Note	

*Osaka University Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

# シュテファン・ゲオルゲ研究

伝記 (4)

八 木 浩

## Stefan George

— Sein Leben (4) —

Hiroshi Yagi

### Umriss

Nach dem Tode Maximins ist George immer inhaltskräftiger und inhaltschwerer geworden. Sein Freund Verwey berichtet: „Er war ganz und gar Leidenschaft, sein ganzer Körper war eine einzige Bewegung. Daß die Welt sich ändern würde, war für ihn eine Gewißheit.“ Er war der wahre Zeitgeist. Nach dem ersten Wagnis der Jugend, dessen Höhepunkt „das Jahr der Seele“ war, wollte er das zweite Wagnis, den „Siebenten Ring“ und den „Stern des Bundes“ wagen. Es war eine Art Revolution, um zu einer deutschen Bewegung zu kommen. „Deutschsein“ besteht nach George darin, daß jeder Deutsche in dieser oberflächlichen Zeit nach seiner Art Jean Paul, Goethe und Hölderlin, jeden nach dessen eigener Art kennen lerne und zugleich Platon, Dante und Shakespeare erkennen und verstehen lerne.

Heute, wo genaue Interpretationskunst an der Tagesordnung ist, ist Georges Art, Dichter zu lesen, prophetisch groß. George hat behauptet, auf der Höhe des Königstuhls sollte man Gedichte lesen, und nicht nur im Zimmer, sondern oft im Freien. Man muß sich den Rhythmen, den Fließenden, anvertrauen und Mut haben. Hier handelte es sich nicht darum, schön oder mit großer Wirkung zu lesen, sondern für sich selber, für den Geist selber zu lesen. Hier mußten Bild und Begriff, Form und Inhalt enig sein. Dieses Beispiel ist sehr gut und passend, um die geistige Methode des neueren Kreises zu erklären. Den Ästhetismus gab es bei ihm gar nichts.

Hier habe ich 1) über seine Freunde vor dem „Jahrbuch für die geistige Bewegung“, 2) über seine Freunde um das „Jahrbuch für die geistige Bewegung“, 3) über verschiedene Urteile über dieses Jahrbuch ausserhalb des George-Kreises, besonders von der Seite Max Webers und Rodolf Borchardts geschrieben. George's Unternehmung auf Tod und Leben in der verzweifelten Zeit, nämlich die geistige Bewegung in dieser Zeit, ist wie Borchardt sagt, vielleicht eine „Lehre“, dichterisch eine „Verzweiflung“ gewesen, die zwischen „noch nicht“ und nicht mehr“ gespannt war.

マクシミン体験をへたのちのゲオルゲが、人生内容にひどく重点をおき始めたことは、多くの人の目をみはらせたところであった。それを歴史や社会の外的事象と関連させて理解すべきか否かということになると、もちろん関連させて理解すべきであることがはっきりしてきたように思われる。マクシミン体験後に現れた事件や人物のすべてが歴史や社会と切っても切れない重大問題と関連あるものであることが、今や余すところなく明白になってきたのである。1915年ごろまでの10年は、資本主義と帝国主義が手を伸ばし切って戦争につかみかかる前の、実に錯誤に充満した時代であった。価値がゆれ動くこの危機にあたって、ゲオルゲが一層高い価値を高くかけるために生き、それを詩作と人間関係に実現してみたいと思ったのは怪しむにたりない。形式の遊動にふけるものを奴隷視する詩句が彼の詩句の中に散見し始めたのはその徴候だといえよう。クルト・ヒルデブランドが伝えるゲオルゲとヴェルヴェイとの1910年の対談は、ゲオルゲが全身情熱そのものとなり、一つの運動と化して、こういったと伝えている：「世界が変らねばならないと私は確信するのです。」ところがヴェルヴェイはマルキシズムを信奉、その方向に地上の天国を夢見ていた点で鋭くゲオルゲと対立した。ヴェルヴェイは

人間は人間を傷つけ妬み支配せず

知恵にあふれた愛が

詩人と國民を結び 時代が

賢明な目で両者を見つめる

と歌ったが、このヴィジオンの前にゲオルゲは長らく沈黙してすわり、頭を腕で支えて、とうとういったという：「あなたの考えは私には縁がありません。詩的なものでなくて人間的なものが私のと違うのです。」このようなマルキシズム拒否を審美主義や貴族趣味というわけにはいかない。なぜなら時代の支配精神ということで同時に二人は同じ考えを抱いて、その否定で一つになったからである。ヴェルヴェイは次のような詩をゲオルゲに読んで聞かせた。

時代精神 粗野な皮膚と扁平足と散文頓智

冷たく 鋭い悟悟のみで

急ぎ足で 翼もなく 千の足でか

国一面を暗く被う。

ヴェルヴェイは思想の差にもかかわらず、この詩に対するゲオルゲの感動という点で、彼こそ真実の時代精神であった、と示している。ゲオルゲのこの時代のモットーは、「芸術は社会との断絶である (Heute ist wirklich die Kunst ein Bruch mit der Gesellschaft)」という、鋭い反時代的なパトスであった。さて、この誤った時代におけるゲオルゲの反時代的なパトスは、どのような価値概念をよりどころにしていたのであろうか。

グンドルフのゲオルゲに対する献身的な崇拜は例外的だったとはいえ、それがこの時代の若い人人の手本になったことは事実である。そしてゲオルゲをマイスターと呼ぶ若い人人が詩人のまわりに集まってきた。一見これは詩人に行動への意志、権力への意志がきざし、ニーチェ的な超人主義が彼のまわりにはびこったかのようである。彼らは世のだらしなさや欲望に不満を抱き、詩人の力にひかれたのであろうが、実はゲオルゲの孤独な、人を求めぬ淋しさが、逆に、彼らの心をひきつけたようにもみえる。ともかくこれらの人々の家ではゲオルゲが会うに応わしいと思われた人々とゲオルゲとを招いて、互いに冷静に話しあうことが楽しみとなった。ショーナウアーのゲオルゲ伝は、これらの例のうちから奇妙な例を伝えている。そのころツェコーニイ夫人 (Frau Ceconi) であった詩人リカルダ・フッフ (Ricarda Huch 1864—1947) をゲオルゲとともにヴォルフスケール家に招くプランをたてたところ、彼女は迎えにきたヴォルフスケールに、「ゲオルゲが私の知己を得たければ、丁重さと道義にかなった仕方であらうにあればよいでしょう」と答えて、ことわったという。このような例外もあったが、彼らがゲオルゲを招いて精神運動について語ることがいよいよよさかんになった。芸術中心の特色は薄くなり、社会とは断絶したつましい形で、アリストクラシー的な外形で、これらの会合が続いたらしい。しかしこれらの時代について書かれた友人たちの記録から、ゲオルゲが弟子や師を求めたのではないこと、貴族趣味や選民主義を求めたのではないことに留意しなければならない。彼はいった：「新しい文化は少数の根源的な精神 (Urgeister) が人生の律動 (Lebensrhythmus) を啓示し、それが仲間に、さらにより大きな国民層に受け入れられるときに生まれる。この根源的な精神は教義によって働かず、自己の律動によって働きかける。教義は弟子をつくるのみである。」こうしてみるとゲオルゲが抱いていた価値概念は根源的な精神を啓示する人々ということであり、それが教義によらず律動によって次第にひろく国民に伝えられるというのである。さてこの精神と律動的伝達という

ことは、詩精神とクライスといいかえてもよからうが、どのような実体のものであったか。

この時代のゲオルゲは国民的転向をとげたといわれるが、それは彼の詩語の中にドイツとかドイツ的とかいう表現が出てきたからであろう。しかしこのドイツは、およそドイツ帝国のドイツと正反対であって、詩人によれば、「ドイツが10州を占領するよりは、ドイツ的な身の振り方を学ぶ方が大事」なのである。彼がヴォルフスケールと協力して出した詩集は三部作「ドイツ詩集」であり、1900年にジャン・パウル、1901年にゲーテ、1902年にゲーテの世紀という順であった。ジャン・パウルの燃える色彩、深い響きから、ふるさとの純粋な泉を尊ぶことを学びとれ、と詩人はいっている。ゲーテの世紀という題名はドイツの世紀ということと一つだといえるであろう。1908年に出されたゲオルゲの力作、「イタリーにおけるゲーテの最後の夜」から読みとれるように、それは人間の調和と自由の世紀である。さらに、「ヒュペーリオン」という詩をかいたゲオルゲは、ヘルダーリーンを予言者の詩人として高く評価し始めているが、彼もギリシャ＝ゲーテ精神の没落警告者としてのヘルダーリーンであったといえよう。今一人、重大な詩人としてニーチェの名があげられる。ゲオルゲの進歩主義への冷淡さはニーチェの響影だといわれたりする。しかし神は死せりという考えは、ゲオルゲの考えとはひどくかけはなれていた。人間が生きた力を持ち、神に永遠を見る限り、神は生きている。神とは人が新しい名と体を与えるものである。ニーチェの超人思想は低人思想を招くもののだとして、「人間が最高の要求にかなうように敬虔に配慮すべきではないか」といったゲオルゲであるから、ニーチェの思想はゲオルゲの思想と違っていたといわねばなるまい。このような外形からゲオルゲの詩精神の輪郭がほぼ感じられるであろう。それはジャン・パウルや、ゲーテやヘルダーリーンに啓示された本当のドイツを今の時代に照らして考えることにほかならない。こうしてみると、この時代には二つの生きる可能性しかなかったのではないかと思われてくる。社会主義か、それとも精神主義か、いつれかによって時代精神と戦うことであり、前者は労働者の団結によるし、後者は小さい個人的な集りによるのである。前者は資本の動きに攻撃を加えるし、後者は文明現象と縁切りして精神文化の正しい伝承に力を入れる。こうしてこのあいへだたった方向が、双方共可能性として並行して熱烈に存在していた。ユートピア的なゲオルゲのドイツとクライスは、この時未だおそすぎはせぬかのようにあった。今日それがひどく困難になったからといって、これを夢想のみだったといってよいはずがない。もし今日の時点からそんなことがいえるなら　ダンテやゲーテの世界も夢想だったといわねばならぬだろう。この問題に入るにさきだって、このユートピア的なゲオルゲクライスが、マクシミン体験後、1910年ごろまでに、どのような新しい人々を含むに至ったかについて考えてみよう。

ヘンリー・フォン・ハイゼラー (Henry von Heiseler 1875—1928) は1901年にミュンヘンでゲオルゲと出会った。そして芸術草紙VI—VII巻に詩を寄せ、二人の友情は生涯変らなかった。彼の死をゲオルゲは非常に悲しんで、永遠に詩人として友人として忘れられない、と述べている。彼は著名な文学者であり、殊にドストエフスキーやプーシキンなどのロシア文学の翻訳者として名高く、ゲオルゲについても書物を書いた。(彼の息子ベルントも作家として活躍し、同じくゲオルゲについて書いたエッセイがある。) ゲオルゲは「第七の輪」で彼のことをこう歌っている：

人生は君のまわりに美しい垣をめぐらし崖や潮の危険は君にはなかった。

虚飾を求めて自己を失うこともなく

最後の戦いで最後の花環も避けてしまった。

ハイゼラーはペテルスブルク生れで、ロシアに住むドイツ人だったから、第一次大戦にはロシア兵として従軍、ロシア革命を体験した。上の詩はそれよりずっと以前のこと1900年にドイツにきて、ミュンヘンで結婚、フォルデルライテンの農家で家を構えていたところに、ゲオルゲから捧げられたものである。詩人はここでハイゼラーの勇氣と正義と廉潔とをほめている。大戦が終って1922年以後、彼はドイツに住み、ゲオルゲの詩風に影響されて、高貴な新古典派作家といわれ、悲劇「ペーターとアレクセイ」(1912)、喜劇「不思議なランタン」(1919)、詩集「三人の天使」(1926)などをのこした。カルル・ヴォルフスケールは彼についての論文を残した。彼に劣らず親密なゲオルゲの友人として、エーディット・ラントマン (Edith Landmann 1877—1951) を忘れてはならない。彼女の夫、ユーリウスは文学に詳しく、話しずきで、ゲオルゲを導んだ経済学者であり、立派な教育者として、さらに政治家として貢献した人であった。彼の妻も古代文化とドイツ文学に親しみ、ゲオルゲの詩を熱愛し、「ゲオルギカ」(1924)という重要なゲオルゲ論をのこした。ゲオルゲが彼女に多くのことを語ったので、普通の人に聞けない重要な話をここに伝えることができたのである：「外からみたゲオルゲは詩派の頭であったが、彼は生きることを教えると同時に詩作することを教えた人である。これは古代からずっと忘れられていた現象であった。彼は完全な人間が完全な教育家であることを示した。彼を見た人はたれでも、あこがれに満ちて神の完全性にと努めざるを得なかった」というようなことを中心に、彼女はこの書物を書いた。「作品に見出したこと一切を彼自身の中に、さらに彼のまわりに見出すことができた。」「ゲオルゲはかってドイツが持ったことの無いほどの最大のレアリストである。」これらはヒルデブラントを始め多くの同人が伝えることと一致している。ただ彼女が、存在と生成の二概念を対比させ、「発展生成するものは時代精神に規定されるが、時代精神を規定する存在は新しい世界の創造者となる」という主張をとねえ、ゲオルゲから、生成が存在の一樣態であるとい

う生成と存在の関連を読もうとしているあたりは、大変むづかしい問題をはらんでいる。一体このころの彼らには、進歩主義が時代精神に規定されるものと見え、時代と対立するものと見えなかったのであろうか。まだ伝承され保護すべきものの強かった時代の彼らにとっては共産主義も帝国主義も一つの時代精神であったのだろうか。エーディット・ラントマンのこのゲオルゲ解釈を、ゲオルゲの思想弁明にすぐあてはめると危険であろうか？ これはこの頃の文化現象に多くの暗示を与えるものではないか。次にこのころの友人であって、もっとも重要性をおびているのは、ローベルト・ベーリンガー（Robert Boeringer 1897— ）である。彼は1905年にゲオルゲを識り、一生その教えのもとに生きた。1945年にそのころの思い出についての対話の書を出し、さらに1951年に、ゲオルゲの多くの写真を添えた、決定的に重要な伝記を書いた。ここにはゲオルゲをめぐる重要な伝記の事実が並んでおり、これがゲオルゲ伝の最も重要な源泉である。彼はシュツットガルト背後の小さい町に生まれ、バーゼルで勉強、経済学を修めたが、国際労働局の編輯長の仕事のほか、医学・薬学・工学の領域でずばぬけた活動をなし、第二次大戦中はスイスで国際赤十字の混成委員会を構成、ギリシヤ、フランス、ベルギーでヨーロッパの人々を助け、1945年からは戦後のドイツに援助の手をさしのべた。戦後に出た彼への感謝の書（Freundesgabe Robert Boeringer）は、ホイス大統領を始めとする友人の告白等で、50人以上が800頁もの筆をとっている（Deutsche Zeitung, Jahrgang 12, Nr. 69）。全く多面的でありしかも一つの統一がある人、精神の高貴そのものでかつ人類への奉仕にみちた人、経済学者であると同時に詩人である人ベーリンガーは、そのヒューマンズムを、20才のときゲオルゲにあって以来発展させたのであった。彼は「ゲオルゲ・ホーフマンスタール往復書簡集」を出し、芸術草紙にも詩を出した。さらに詩論や、プラトン論、ホーマー論、詩集もあり、彼のなしたすべては、それと相まって、真善美の輝きをいやが上にも放っている。

このような三人をあげただけでも、ゲオルゲのいう詩精神の意味がわかってくる。彼は人間活動の基礎としての詩精神を信じている。これを当時のドイツの作家達、例えばベンや、T・マンや、ハウプトマンと比べてみると、その特異性がめだってくる。マンは1900年ごろから「ブッデンブローカー一家」のほか、かづかづのノヴェレで、旧世界像の解体ということを考え、芸術家意識をテーマに、ワーグナー、ショーペンハウアー、ニーチェを考えつつ書いていった。10年若かったベンはもっとちかきに現実崩壊の問題にとりくみ、失われた自我というテーマにとりついた。35才前後迄この二人はこの点で共通であった。一方ハウプトマンは早くから社会主義演劇にとりくんだのであるが、除々に神秘的になり夢想的になりつつあった。しかしゲオルゲは、絶対といえるほどに精神が充実する可能性を信じ、そこに自我喪失や現実崩壊を感じなかった。だから彼

は社会主義芸術というような可能性も考えなかった。審美的なところや絶望的なところや芸術商品的なところが、すでにその当時の文芸に充満していたことを思うならば、ゲオルゲのもとに集った若い人々のうけた感動がわかってくる。彼は当時のどの芸術家よりも非商業的な人生を送っている。彼が戸から戸を叩いて生き得たとは、現代からみると、殆んど奇蹟に近いことであった。精神こそ神の力と信じた彼は、友人の戸から戸を叩き、そこで数日また数日と滞在し、彼の言葉を借りると、律動によって語りあった。ロベルト・ベーリングーもその他の同人も、口々にその会合のことを記録している。1910年から1913年にかけては、よくベルリンでゲオルゲを囲む詩の朗読会があった。それは現代のもののように、誰か中心人物がいてそれに尋ねるというようなルーズな会ではなく、それぞれがベストをつくして、意味、リズム、メロディー、韻を統一し、詩を正しく響かせるのである。各自の声に乗って、朗読が一人一人の身心から美しい芸術となって生まれ出た。現今のはやりの註釈術などは、これと比べると全く死物のように感じられるだろう。これまでの友人に加わった人をあげると、まづ歴史家クルト・ブライジヒの弟子ベルトール・ヴァレンチン (Berthold Vallentin 1877—1933) があげられる。ベルリン人で、法律専攻の弁護士である。彼は25才のときゲオルゲと識り、感動と敬意をこめて交わり、生き生きした文体で詩人の魂を伝える重要な書物をのこした (Gespräch mit Stefan George 1902—1931)。ドイツ中荷物や背に散策し、古城や寺院を尋ね、特にナポレオンやヴィンケルマンに傾倒して書物を残した彼のことに、この本のテーマにはそれらをめぐるものが多く、ゲオルゲの多面的な教育的反応がよく表現されている。彼はまたかなりの詩人であって、その詩は15の詩圏をなす。彼はゲオルゲについて歌っている：

私のあるまをあなたはうけいれ

私にあなたの明るい言葉を投げ

毎時間 たいへん胸を騒がせたが

それが今 巨大にのこされている。

彼の対話集は1909年と、1920年前後と、1928年前後に集中して現れている。1909年の対話を若干とってみると、ゲオルゲがローマの文学にいかにか精通していたか、いかにかドイツ文学を見ていたかがよく伺える。ここでは諸種の芸術に対するゲオルゲの考えもよくわかる。ゲオルゲはホーマー、ダンテ、シェイクスピアを真の詩人だといった。この厳しい選択の尺度にゲーテすら近づけぬほどである。「ゲーテは劇作家としては第二級である。しかし教育家として、形成された人間として、ドイツ人の中で特異な存在である。もちろん抒情詩人として第一級の詩人なのだが。」彼はこのようなことを語るのに、ホラーツやヴィリギリウスやダンテを読み、さらにドイツの詩



人の句を朗読するのであった。直接詩を読んで語る彼の判断は厳正である。例えばヴァレンチンが、ハイネの詩以来諦念や絶望のまなこがきざしているのではないかと問う、なぜ国民から縁遠い詩人の影響がこんなに広いのか、と問うたところ「この人のエピグラム的なものが彼に対する国民の人気を得させたのだ」と答えている。グンドルフがハイネをこきおろすのとは大きな違いだといえよう。1月28日付の日記は、次のようである：「ヴォルタースとマイスターと三人で良い談話。ベルリンについて。全く壮大なもの、完全に美しいものは、ここでは完全な非芸術となっているという。中心街のロココやゴシックの美しさを指摘したところ、マイスターはいった——それがまさにいけない点なのだ、そんなものは全く見る必要がない。全く悪くて、しんまで無芸術なものとしてベルリンは美しいのだ、と。」一体ゲオルゲはこの短い言葉で、ベルリンは無芸術即美とのべ、何をいわんとしたのであろう。その時もはや美は芸術であり得なかったのか！ もはや美はみせかけの美で、無芸術でこけおどしで、商品であったのだろうか？ もはや詩人は、美即芸術とは絶対に考えていない。このようなひどい町ベルリンで、ゲオルゲはさらにハインリッヒ・フリーデマン、(Heinrich Friedemann 1888—1915)、クルト・ヒルデブランドト(Kurt Hildebrandt 1881—)に美しい魂を見出した。彼らはプラトン研究に専念し、それがもとでクライスの中にもプラトンがさかんに読まれ出した。ホーマー、ダンテ、シェイクスピアと共に、プラトンが研究され始めた理由について、ヒルデブランドトは書いている：「われわれはゲオルゲにおいて、愛すべき心、あらゆる人間的な動きの花咲く力を愛したのだ。………実際、英雄が現前し、創造するのを見たことのある者は、何世紀も昔にさかのぼり、英雄を意義づけることが可能なのである。」1910—1913にみられるこのような基調は、同じくヘルダーレーンの発見にもあらわれている。浪漫的詩人として少し読まれるにすぎなかったヘルダーレーンが、真のギリシヤ精神として、更にドイツ人の予言者、愛の教えの告知者として、未来の指導の星と仰がれ始めたのは、プラトンの場合と並行している。そしてこの詩人の場合、運動が最も華かであるようにみえた。ゲオルゲはヒューペーリオンを詩にし、ヘリングラートは全集を企劃し、グンドルフはアルヒペラーグスを論じた。そしてこの種の輪読、朗読、研究は、ベルリンに、ハイデルベルクに、ミュンヘンにとひろがったのである。(ヒルデブランドトは最近、徹底したゲオルゲ研究を出したが、ひどく重要な文献である。)

ミュンヘンに集ったクライスの名をあげると、建築家のパウル・ティールシュ(Paul Thiersch 1879—1929)、1911年詩人と識って10年間の交友記をしるしているハンス・ブラッシュ(Hans Brasch 1892—1950)、F・グンドルフの甥で詩作に巧みであったハンス・エッチンゲル(Hans Oettinger 1883—1949)、1920年に共産主義に転じたとジャイメが伝えているロタール・トロイゲ

(Lothar Treuge 1877—1920), ハンナ・ウォルフスケールと親交あり, 種々の悩みのため自殺したワルター・ヴェングヘーファー(Walter Wenghöfer 1877—1918)を始め, 多く列記される。すべてみな詩を書いている。特にF・グンドルフの弟エルンスト・グンドルフ(Ernst Gundolf 1882—1942)は素描に長じ, 詩もうまく, 静かでひっこみ勝ちであったが, 親密にゲオルゲと結ばれていた。彼は追放され亡命したあげく, 1945年にロンドンで死んだ。ルードヴィッヒ・トールメーレン(Ludwig Thormaehlen1889—)も1909年からゲオルゲと交わり, 詩作にはげみ, 多才の人であった。彼は美術史家であり, 彫刻家であり, ゲオルゲを彫刻した作品をのこし, 更に思い出をつづった書物が出版されることになっている。ボッフム劇場監督, ドイツシェクスピア協会会長ザラディン・シュミット(Saladin Schmitt 1883—1951)もその詩を始めて草紙にのせ, 大いに期待された。ゲオルゲはその作品の純粋な造形性をほめて, 「私の血, マクシミンのよき歌をつぐ最上の歌」と歌ったが, のち転向し, 関係がなくなった。断絶した点で, ヨーゼフ・リーグレ(Josef Liegle 1893—1945)も彼とにている。彼は建築学から古代学に転じた立派な学者で, 捕虜になってもギリシャローマの古典に読み耽り, プラトンを離さず, オイリピデス, ヴィルギールを訳したが, 残念なことにその訳稿は紛失してしまった。最近ヒルデブラントと相ついで立派なゲオルゲ研究書を出したエルンスト・モルヴィッツ(Ernst Morwitz 1887—)は心から師に接し, 僧の如く従順で, 静かであった。彼はゲオルゲの死のときまで彼の身近かにあった。彼はまたゲオルゲと共にロダンを訪問したこともある。その詩は完成美を目指し, 造形的である。彼はヒットラーに対し抵抗したが, それについてはまたのちにしるす。ゲオルゲは彼に, 「ファルケンシュタイン城」という詩を捧げた。モルヴィッツに劣らず, 従順であった友として, さらにエルンスト・グレックナー(Ernst Glöckner 1885—1934)をあけねばならない。彼は美術史家ヴェルフリーンの教えをうけ, ベルトラムと親交があった。ゲオルゲは「神秘的ドイツ」でこの人の生涯を記念し, その惜しむべき詩才を歌った: 「くすんだ金髪で, 笑いをうかべ, いずこに行くかを告げた人よ, その快活さあふれる静けさよ。」グレックナーの告白は, これらの若い人々がいかにゲオルゲを見たかについて語っている: 「この時代に彼がいなかったら危機以上のことになるでしょう。そうなればドイツ人の全状態の象徴であり, 運命であり, 最後の希望であるものの埋葬であり死滅なのです。…彼の中にはドイツ国民の全力が集中しており, 彼の中にわれわれ国民は生きているのです。」彼の友人エルンスト・ベルトラム(Ernst Bertram1884—)はゲオルゲ・クライス中の一人といわれるが, どの研究書にもその記事がないので, グレックナーを介して, クライスを高く評価し始めたのではなかろうか。このすぐれた文芸学者に戦後まで友人トーマス・マンがあたえた書簡が最近出たが, そこにもゲオルゲに関する記事がある。ヒット

ラーが政権をとった1933年に彼が行ったボン大学での講演は、ゲオルゲ最後の誕生日のもので、「ドイツ古典の可能性」と題され、ゲオルゲの時代的意義に及ぶ危険なものであった。ここではゲルマンという危険な単語がふりまわされ、歌と国の一致がすぐさま歌と現実の一致と考えられやすい表現になっている。ゲオルゲの考えたこのころの精神王国が、100年200年で実現されるような簡単なものでなかったことを、ベルトラムが理解しなかったなど、私達には信じられない。だがこの講演がもとで、一般にはゲオルゲの詩をナチの世界が利用するきっかけをつくった一人が彼であるかのようにいわれている。

ベルリン、ミュンヘン、ハイデルベルクにおける1910年ごろまでのこのようなゲオルゲ中心の活動は、いよいよエネルギーをたくばえ、一つの運動に発展していかざるを得ない状況にあったのである。クライス外部に、ベルトラムやカロッサや、ブライジヒやデュルタイのような共鳴者がいよいよ多くなるとともに、クライス内部ではゲオルゲの人生観と芸術を文化史に、精神科学に、政治に、神話的な論理で適用しようとする運動がおこるのは当然の勢いだった。ヴァレンチン、ヒルデブラント、ベーリンガーらをひきいて、その動きを推進したのはヴォルタースであった。彼は詩をイデオロギー化して、詩に力を加えて変化し、いわば精神哲学めいたものにした。1909年の彼の論文「支配と奉仕」は多くの影響があったし、また1909年の芸術草紙第八巻、それに続いた第九巻の論調もそれに拍車をかけて、いよいよ精神と政治（社会）批評が不離一体化し始める。（ホーフマンスタールはこのような動きに疑いをもち、すでに1903年にこの種の呼びかけに応じていない。）おそらくこれには余りにも貴族趣味めいたところや、大衆から隔った主張や、指導と信徒的な力の動きがあったのではないかと常に一般からは冷たく見られやすいが、それも当然のことであって、この精神運動の批判は今になっても安全に行える距離が見出せないといえよう。ともかく1910年、芸術草紙から「精神運動年鑑」（Das Jahrbuch für die geistige Bewegung）が出たのである。1903年にホーフマンスタールに呼びかけて以来、ゲオルゲが抱いていたプランがこうしてみのったのである。ここでは詩作品がみられず、普段の芸術草紙とは傾向がかわり、論文と批評のみがある。それもひどく論攻論難が強い。カルル・ヴォルフスケールは文学の動向を芸術草紙と対置して論じ、F・グンドルフはゲオルゲ像と題して、クラークスとR・ボルヒェルトを政め、ヴァレンチンは進歩派の分析と批評を行い、ヒルデブラントは古代学者ヴィラモーヴィツ・メレンドルフを攻撃し、ヴォルタースは新文化政策の基準線を引いたのであった。その論点がどれほど主観性を交えずに正しいといえるかは、余程の学問の巾がないといえないだろうから、のちにマックス・ウェーバーのクライス観を紹介し、さらにクライスの攻撃の対象にされた一人、ボルヒェルトのゲオルゲ観を紹介し、少しでも客観性をうる手段にしたい

と思う。

序文は次のように書かれている：「現代、選択もなくくっつけられた教養素材が積み重ねられ、それらが文化と精神を推進するどころか、窒息させようとしているではないか。そこでこの年鑑は、選ぶ、という義務を引きうけてみたのである。そして人格者であろうとせずに、意識して一方的に立ち、全綜合意志、すなわちイデーに従ってみた。われわれは、直接的かつ無指導的にあらわれるあらゆる人生に、燃える関心と敬愛さを抱いて近づき、きらめく遊びを軽視して、表面からの光などは人生だと承認しないであろう。」これは同人のすべてにあてはまる宣言であり、このイデーがいろいろな人の多面な方向に向っていく。ヴォルフスケールはゲオルゲとの日頃の対話に基いて、神秘的ドイツの芸術の夢を書き、国民性が強調される根拠として、「言語こそ諸国民のデーモンである。この魔術の秘密を守ることが最大の課題である。」と説き、当時の文学風潮を否認した。グンドルフはこれまでのゲオルゲの詩作を総括して論じ、クラークスが根源へ帰来するに比し、ゲオルゲは根源から形づくるとのべ、さらにボルヒャルトを単なるホーフマンスタール賛美者にすぎぬ文献学者だとなし、本質もなく力づくで対立論理をつくっているとのべた。ヴォルタースの「支配と奉仕」は神話的な論理で、直接体験から語り、「ここに体験としての形姿、形姿としての体験あり、二つが超個人的なものに高められた。この見つつ造形する仕方の最高点に神話がある」と書き、神話の創造という仕事を果たした。ヴァレンチンは、「大きく成長したゲマインシャフトの中に個々のものが育つ」という文章で、クライスの基礎づけを行った。1912年にこの冊子が公開の増補した形となって出たが、その序文は次のようである：「今日の人間性は、人間性を求める戦いではなく、人好きする人間達の是認ということに本質がある。それは中庸、つまり価値を考えない、数の是認ということになった。国家は弱少のもの、奇形のを保護せんとしているが、そんなものは全体調和的人間の弱化和奇形化に役立つのみだ。国家は奴隷制を禁止しているが、みんなが奴隷になるように全力をあげているではないか。」さらに序文は、女性化やアメリカ化を指摘し、新聞を責め、社会の危機に及ぶ。「こうしてさらに50年進歩が続き、進歩の欠陥で世に出ないものはなくなり、交通、新聞、学校、工場、兵營の進歩がすみずみにいきわたるなら、われわれは信じざるを得ないのである：現在問題になっているのは、一民族が他民族を圧迫するかどうかとか、一階級が他階級を圧迫するかどうかとかいうことではなく、全然別の戦い、オルムートとアーリマン、神と悪魔、一世界と他世界の戦いなのである。」1911年には第二巻が出た。ここでグンドルフは時代の没落現象を批判し、手段と目的をとり違え、偶像の製作にふける時代を攻撃し、「歴史の唯一のテーマは、信仰と無信仰の戦いであり、今日では絶対的なものと相対的なものの戦いである」とのべている。ヴォルタースはゲオル

ゲの形姿が教えるのでなく、形成するのであると説き、人人にゲーテの、「愛は支配せず、形成し、かつそれ以上のことをする」というメールヒェンの一行を想起させる。この号にはヴォルフスケールの寄稿がない。同様にして1911年末に第三巻が出された。序文では、どんな目にも「一般的な喜びのなさ (Die allgemeine Freudlosigkeit) とローマ末期的様相」がおおいがたくのしかかっていることを指摘、「誰一人正直に今日の世界状況の基礎を本気に信じられない、というこの悲観的な予感が、時代の最も純粋な感情である」といっている。クライスもゲオルゲも、資本主義や工業化から何の治癒力も出ないことを知りすぎていた。ゲオルゲの手になるらしいこのカッサンドラ風の警告に、今日われわれは胸を動かすのである。ゲオルゲはこの運動を行うにあたり、問題がおこらぬように三人の弁護士にたのんでおこうとしたほどであったといわれる。

さてこの雑誌のどこまでがゲオルゲのものであり、どこまでが彼の責任なのだろう。ヒルデブラントによると、この運動成立は、直接、ゲオルゲの詩集「約束の星」の約束・同盟 (Bund) につながるイデーから出発したという。年鑑にゲオルゲ自身の記事はないが、部分的に彼が協力したこともあり、ヒルデブラントは「ゲオルゲが真の発行人だ」といっている。殊に序文はゲオルゲ色が濃いいといえる。さて、クライス即ちこの運動かということになると、ゲオルゲはどの友人にもヴォルタースの試みを押しつけたことがなく、事実、モルヴィッツやベーリンガーなどはこの試みに関係がない。「一度でもゲオルゲと共に仕事をした人は、ゲオルゲが個人の考えに圧力をかけるなどというわさを聞いて、ただ笑って、反論する気にもなるまい」とヒルデブラントはいっている。こういうわけで、この雑誌に対するゲオルゲの反応が肯定的とはいえぬ、というショーナウアーの言葉も、うなづけよう。これはゲオルゲのものともいい切れず、クライスのものともいい切れないものだからである。ゲオルゲは論調が過ぎるとか、詩人はこんない方をしないとか、教育者はこれではだめだとかいいつつも、ともかく承認、ヴォルフスケールなどの言葉に反論しつつも、内容的には自分のイデーと近いことを認めざるを得ないのであった。結局烈しい論調に顔をそむけはしたものの、につめてみるとイデーは自分の詩のイデーと一つだったのであろう。これは大変重大な問題点ではなからうか。文学の本質が例えば比喩的なものの中に内容と形式がとけこんだところにある、と仮定してみよう。もしこの比喩を本物だと考えたらどういうことになるか。その時、芸術のまこととまことらしさ (ゲーテ) の限界線が失われ、猿が甲虫の絵をくったり、(アルベルト・シュヴァイツァーがいう例のように) アフリカの土人が裏切り者ユダの紙芝居に石を投げつける事件にたことがおこるのではないか。こうして詩と政治や社会との力づくの緊張は、大変危険であって、問題性をはらんでいる。クライスがもし詩と政治・社会批評とを一致させ、時代との総合的対決を迫ったとすれば、やはり挫折するに違いない。こ

の運動にはその危険が感じられるところがあるのだが、しかしこの運動は、大局と実質からみて時代との対決などとはほど遠く、一つのイデー、すなわちゲオルゲの理念の多面な、共和的な表現とみられるべきであろう。

この運動が短期に終わってのち、ベルリンでの朗読会は終了、めいめいの同人は緊張した様子で自分のまわりの友人とあちこちに散らばり、この運動の理念をいつまでも育成しようとした。あたかもゲオルゲ直属といわんばかりに彼らの上に星が輝いている。「約束の星」110頁目の詩は、それを歌って、道はわかれ、目的はわかちあう、という。(Ihr seid im gang getrennt im zweck gesellt.) 私はここで立ち止って、この運動に協力した人々について、若干考察してみよう。

フリードリッヒ・ヴォルタース (Friedrich Wolters 1876—1930) は、芸術草紙 8, 9, 10 巻に詩をのせている。それらは燃える心の流出というよりは、冷い能力の表出であり、詩的言語操従だといえても職人的な支配力が濃厚すぎる。彼のロマニストとしての職業には4世紀から15世紀のラテン教会詩人のもの (Hymnen und Sequenzen, 1922), 1世紀から5世紀のギリシャカトリック詩人のもの (Lobgesänge und Psalmen, 1923) があるが、音が美しく、しかも快感に乏しいといわれている。彼の才能はそこになく、彼には常に緊張して何かを企てて、大胆で攻撃的なところがあった。ゲオルゲは「ヴォルタースにはやらせておくほかに手がない。そうしないとんだことを仕出かすから」といった。グンドルフは「王宮で王を殺して逃れてくるような男を手に入れた」といった。彼が働きかけた仕方は、支配と奉仕 (Herrschaft und Dienst) である。このヴォルタースとグンドルフとヴォルフスケールが三人でクライスのトリオをなしたが、この三人は凡そ違った人間であった。グンドルフの論文は無時間的形象的だが、ヴォルタースのは時代現象に対する戦いに満ちている。戦場の彼方でなく只中から敵を攻撃するやり方で、常に行動的だったヴォルタースに比し、グンドルフの方は精神的であり、結局この二人が相補って一つになれるようなものだったのである。ヴォルタースはさらに指導的な意志が強く、現代の腐敗や学問の有害さを若い人々に説いて、彼らを導びこうとした。大学は生きた精神の養成所でなく、一般教養の場になっているではないか、われわれは精神のふるさとをあらたに創り出そうではないか、プラトンのアカデミーのように、昔の修道院のように、市場と街道の騒音から遠く離れ、諦念に満ち、しかも人間性を高めるに努め、純粋な、英知にあふれた伝統を未来のために伝えようではないか！ すぐさまわれわれは精神の堅い砦を建てよう！……このように説く彼のプランに、ヘリングラートなどの若い人人がひきつけられた。グンドルフはこのような精神の城の最も気高い教師であり、住人だったけれども、城主になる資格がなかった。それこそヴォルタースの任務であった。グンドルフはしかしこのような考えに対して比較的冷たかった。結局精神運動の完全

に新しい国への扉を開いたのはグンドルフでなくヴォルタースだった。彼はゲオルゲの中に新しい支配者を見たのみでなく、その根源を知り、新しい世界の素材と力とを提供したのであった。ヴォルフスケールの方はここにこそ新しい青年の態度とものの考えがあるとはめている。絶対的なものと完全なもの (Ein Absolutes, ein Vollkommenes) —そのみが充足と解放をわれわれに与えるのだ、このような考えを独創したヴォルタースは、たしかに指導的な人間だった。しかし彼は多くを与へ、余りうけとるところがなく、根本から生まれ変わるには、余りにおそくゲオルゲのもとにきた。若い友は彼が余りに多く前生 (Vorleben) を持ちすぎているといった。彼は意志ですべてができると考え、いかにあるかを考えず、余りにも支配的特性を持ちすぎたので、ゲオルゲはそれを好まず、その仕事の可能性を怪しんだ。ゲオルゲは学問や意志などで若い人の素質をきめる可能性がないと主張、天与のものによる他ないことを常に強調している。グンドルフやヴォルタースにくらべ、三人組の一人、ヴォルフスケール (Karl Wolfskehl 1869—1948) はもう既に40才になり、その著述によって大いに知られていた。しかも彼は情熱を失わず、自由の精神があり、火山のような自然力に富んでいたもので、グンドルフやヴォルタースよりも一きわ傑出していた。彼は、目こそ殆んど見えなかったが、内面の目でどんな偉大さでも美でも見ていたのである。さらに彼は醜をも貧をも凝視できた。彼は人を愛し、贈っても尽きるところがなかった。クライスの最年長者として立派な詩を書いてきたが、残念なことに言葉の力は余りに大きな情熱の力にうちかてなかった。彼が若い人をとらえる点はまたグンドルフ、ヴォルタースに劣らない。例えばヘリングラートも彼から非常に多くを獲て、彼を尊敬していた。彼はヴォルフスケールの本質に迫ろうとしていろいろ努力したものだ。

ミュンヘンで中心をなしていたヴォルフスケール、ハイデルベルクで中心をなしていたグンドルフの二人は、常に往復して交わっている。このような意見交換は仕事といえるほどに規則的で頻繁なものだった。ゲオルゲの力でハイデルベルクが輝き始めた日月にふれようと思えば、若い献身的な人々、殊にW・ハイヤー、ヘリングラート、ザーリン、ゴートハイムなどにもふれなければならない。ウォルフガング・ハイヤー (Wolfgang Heyer) はプロシヤの官吏の出であり、ノルベルト・ヘリングラート(後出)はバイエルンの出であった。この対照的な北独と南独の二人をゲオルゲは、大戦前にグンドルフ以上に愛していた。そして彼らは集ってはゲオルゲ中心に、ゲオルゲとヴォルフスケールのアントロジー「ゲーテの世紀」を読んだのである。彼らの朗読会がどんなものだったかをよく伺わせてくれるのは、エドガール・ザーリン (Edgar Salin 1892—) の著述である。彼は始めて朗読会に出て、ゲオルゲに朗読させられたときのことを次のように回顧している。詩人は若い人人にあうとすぐ朗読させ、その人の素質を見んとした。ルー・アンド

レアス・サロメとリルケもこのような会に出たのであった。詩の朗読は日本におけるよりもヨーロッパでさかんだが、これは中世からの修辞学の伝統に負うのかもしれない。社会主義国では労働者の前で読まれるし、資本主義国でもラジオでよく放送されるが、ゲオルゲの詩の朗読精神は、人間の完成と存在を示し、あるいはそれを追究する、純粹独自のものであった。朗読の意義について、ザーリンは、「朗読こそ詩精神に入っていく唯一の道です」と答えている。始めハイヤーが読んだ。彼の読み方は調子も律動もなく、声がうつろでよそよそしかった。ゲオルゲの批評は厳しく、単調さが責められた。「強音を強く読みすぎ、そのため意味の強弱がとれなくなった」と注意された。ザーリンが読んでから、次のような注意が与えられた：「律動に、流れゆくものに信頼を持て。」「勇気を持て。」「部屋の中だけでなく郊外でも読むこと。」「王座の高みで詩を読んだか。」「『ゲーテの世紀』をしばしば読め。あなたは声とリズムの多くのありかたがわかっていない。」これは1913年、大戦前の朗読会のことだが、ベーリンガーも1905年の朗読会について次のように伝えている。ベーリンガーはゲオルゲの詩集「人生のじうたん」、「序曲」の詩を全部暗誦した！ゲオルゲは若干誤りを正して、後に自ら詩を読んだ。その一見単調そうな読み方は、話し言葉と歌との中間であった。しかもそれは律動、句切れ、韻などの詩の特性に大変注意したイントネーションをもっている。意味がそれとともに共鳴したが、そのみが支配しているのでもなかった。言葉の二つの自然ともいうべき形象と概念が一つの言葉をなしていた。その読みぶりは真剣そのもので、そのためその読み方に連禱(Liane)のようなところがあった。同じくザビーナ・レプシウスもゲオルゲ風に読むことの重要性をほめている：「詩を読むこの新しい方法をうけいれた者は、これこそ終局的な読み方だとみなさざるを得ない。この方法に深入りしたら、誰が誤ったパトスや古いアクセントで声を上下させて、一語の中ですらシラブルの数に応じて3、4回かえていくようなことで満足するだろうか。」たしかに一つの作品を完全に王者のように読めるなら、もはや地をほうような詩の分析や文芸学はいらないことであろう。今日文学は、思い切ってこのような方法にかえてもよい時がきている。殆んどヘルダーリーンに捧げられたノルベルト・フォン・ヘリングラート(Norbert von Hellingrath 1888—1916)の活躍にあたって、朗読がいかに力強い方法であるかがわかった。情熱と奉仕、ヘルダーリーンへの高い敬意、独自の熱狂的文体できわだった特色をもつヘリングラートは、文献学者の無理解と戦って遂に立派な博士論文「ヘルダーリーンのピンダール訳」をものにしてみんなを驚かせた。彼が全集出版の難事ととりくんだ時、みなが集って読み、語り、それから出版することとした。その出版に際しての苦労は有名だ。進る詩想を伝える走り書きの、とびとびの文を皆が集って思案し、一頁また一頁としげみをわけゆくヘリングラートに皆は感嘆した。訓練のない判定法は役



だたなかった。虫眼鏡で拡大するよりは、声を大にして朗読をくり返す方がこんな場合役に立った。それによってこれまでの読み誤りが発見されたことが多かった。この活躍によってクライスの間にヘルダーリンへの道がひらかれる。彼は詩人の遺稿を求めて歩き、いろいろの辛苦をなめた。にせの記録、真実を隠せという強要などの悩みをクライスの人人がともにした。ザーリンはゲオルゲがどんなに熱心にヘリングラートに働きかけたかの一例を伝えている。新刊の全集第五巻を手にしたゲオルゲは、序文のヘリングラートの文体を厳しく批評し、殊につづりが旧式を保持しているのを責めた。「今 Reegnend とか Diss とかいうつづりで、芸術草紙に対して進歩的だといえますか？こんなことが詩人への奉仕だというのですか？」これに対しグンドルフやヘリングラートは、今日の綴字が意味深くないとか、再現の忠実正確さが必要だと答えたところ、ゲオルゲは愛情をこめ、「お前は学者だからこんなことがわからないのだ」といった：「ドイツ語が古代ギリシャ語のように発展しおえたものでないのに、その変化に抵抗してみて何になるのか。……なぜヘルダーリンの賛歌がこんなに長く埋められていたのだろう。ドイツ人がわれわれ以前にそれを理解するほど豊かでなかったからだ。それなのにあなた方は、技巧を弄し、古風なヴェールをきせようとしている。これなら埋葬仕事のようなものだ。」それでも屈せず、ヘリングラートは、ヘルダーリンの綴字が母音の長短に忠実だとのべだので、ゲオルゲは怒ってしまい、「ていさい屋！ヘルダーリンの綴字法は悪いのだ。それはバロック風だ。余分のしるしかぶさっている。中世の人は具体的だった。われらはそれを再び獲ようと努力しているのではないか」といった。そしてヘリングラートの原稿を見、「何と不要な飾り書きを使っていることか！」と、ヘリングラートの耳を引っぱって、「あなたがバロックの変人だからヘルダーリンを虚飾するのだ」といった。ゲオルゲのこのような言語認識は、全く動的で弁証法的である。発展中のドイツ語に対する彼の流動的な考えは、全く正しいものだといわねばならない。

ゴートハイム家はよくこのような会合にあてられた。そこでクライスはよく論争を行った。経済学者で現代ドイツ社会学界の長老であったアルフレット・ウェーバー（1868—1920）との論争で、よく若い人人の精神が練成され、ヨーロッパ、ドイツ文化の腐敗、その基礎である社会の経済問題、その解決などが考えられた。そしてアルフレットの兄、マックス・ウェーバーと論争する論理が練られたのであった。ゲオルゲがマックス・ウェーバー（1864—1920）と出会ったのは1910年の夏であり、それ以後幾度か会合している。双方共相互に自分と完全に違った魂を見出し相互に純粋な仕事に敬意を払ったのであったが、ゲオルゲは自分を進歩せしめる何物をも彼に見出すことができず、交際も途絶えるようになる。「職業としての学問」で、学者に向って純粋に仕事に仕える人たるべきことを要求、学問のための学問を説き、学問と政治の分離を主張、自由

主義的立場を堅持したこの思想家は、ハイデルベルクを中心に当時全独に働きかけ、ユニークな明析さで、客観的学問の最後の立場（die letzte Stellung der objektiven Wissenschaft）を築いてこれを防いだ。彼はゲオルゲ派との論争を特に好み、これを生活の一要素とみなしたほどであった。しかしその結果かえってゲオルゲの学問観は主体性を増し、自らの血潮で一つの立場に立てないような学問に対する絶望を増すようになる。殊にウェーバーはひどく音楽性のない人間であり、芸術を理解し得たが、それを真に具現し得ぬ人だった。彼はただ社会学を利用、体験の欠けたところを間接的認識で補った。彼は殆んど自分の目を信じず、印象を合理的要素に解消して安心していた合理的相対主義者であり、合理化を指標として近代と近代以前にわけ、音楽にさえもそれを適用するというような人である。殊に政治観としてはデモクラシーとリベラリズムを主張したが、いかなる既成の政治システムにも否定的だったゲオルゲにとっては、それも訴える力に乏しかった。こんなわけでゲオルゲ＝M・ウェーバー交渉は短かったが、グンドルフやその他の若い同人は、関係を長く保持した。ハイヤー、ヘリングラート、ザーリンなどはウェーバーの敵でなく、ただグンドルフのみが哲学的に彼と争った。ウェーバーは経済や社会の条件が鉄則だと主張したが、個人の偉大さという点になるとその体系がゆらいだ。彼にとり学問は常に魔術からの解放である。彼はあらゆる魔術的なものをロマンティックだとけなし、魔術が解かれた大衆世界こそ現代の見逃しえぬしるしだといった。これでは詩の世界と宿命的な対立しかないのである。もちろん外的世界に彼のいう現実を認めうるが、しかし人間存在に詩がないといえるであろうか。ショーナウアーはウェーバーの「経済と社会」という本の次のようなところを引用している：「例えばゲオルゲクライスにおけるように、経済的自立、従って恩給生活に召された者のみに限って、経済斗争を止揚していくのがノーマルだとみなすことは、本質的に芸術家的でカリスマ（支配者の超自然性）的な徒弟達にのみ考えられることだ。」しかしゲオルゲクライスは誰にでも開かれた、規則も、会費も、会長も、事務長もない、自由な結合なのであって、寄稿者の報酬もないのである。このごく自然な解放性が世に名高いウェーバーにわかるはずがなかったといえようか。本当の詩人はいつの時代でも、寄食しなくても芭蕉のように生きうるであろう。ゲオルゲの詩やクライスが理解できればできるだけ、ウェーバーは反対し、自分の著述にも不機嫌をふりまいたのであった。ウェーバー夫人マリアンネは婦人解放運動の先駆として活躍し、その件の著述もある。ウェーバー夫妻が先入感によって判断し、ゲオルゲクライスに手厳しい非難をしたことは、不当なことであるとザーリンはいう。殊にゲオルゲクライスの大衆誤解、女性軽蔑という二件は、この二人に由来するポピュラーなデットルとなった。

われわれはここでゲオルゲと当時の哲学の関係をのぞいてみよう。「精神運動年鑑」ではアン

リ・ベルグソン（1859—1941）の考えが出ているといわれるが、それはエルンスト・グンドルフがゲオルゲの手を借りて書いた哲学論によるのである。ベルグソンは当時ヨーロッパで広く読まれたが、それは実証主義から忘れられていた創造精神を強調したことによる。F・グンドルフもゲオルゲもベルグソンを読んだ。エルンスト・グンドルフはクライスがどれほどベルグソンに負うかについて暗示したが、詩の本質を考えるにつれてベルグソン哲学もクライスの人人から遠ざからざるを得ない。この論文の結論は、「われわれの体験の絶えまなく流れる直観は、形姿と法則を創造する精神よりもベルグソンに近い」となっている。しかし、ヒルデブラントは形姿と法則を下位においたこの結論に強く反対している。そのころ世界観学を斥けて現象学を考え出したエトムント・フッサール（1859—1938）の哲学もヨーロッパに影響した。マックス・シェーラー（1874—1928）はフッサールとゲオルゲの類似性を指摘し、それは現象の本質直観であるとなした。ゲオルゲは現実をカッコに入れるというような理論にくみしなかったが、フッサール哲学の客観的労作を尊んだという。しかしゲオルゲはシェーラーに対しては、その人間学を斥けて警戒したと伝えられる。

ゲオルゲとマクシミンやグンドルフなどとの新しい関係は、ホーフマンスタールやレヒターやヴェルヴェイとの離反の、直接または間接の原因となった。さきにのべた詩人学者のルードルフ・ボルヒャルト（Rudolf Borchardt 1877—1945）は、このような動きの批評を早くから行った点で、最も注目するに値するので、彼のゲオルゲ観の動きをしらべることにした。彼はホーフマンスタールとゲオルゲの二つのボールの間に立ち、ひどく悩んだ人であった。ウェルナー・クラフトが紹介しているところによると、ボルヒャルトはケーニヒスブルクに生まれたユダヤ人で、ゲオルゲより9才、ホーフマンスタールより3才若かった。彼のゲオルゲ批評は1902年にゲッティンゲンで行った講演に始まる。これはホーフマンスタールの詩を論ずるものだが、実はゲオルゲの方が彼にとってより大きな精神体験であることがわかる。彼の生涯を規定していくのは、彼のゲオルゲ観の変遷であった。ゲオルゲのもつ問題性を彼ほど深く体験し、悩んだ人はいなかった。それは除々に超個人的な時代方向探知に向っていく。1902年の講演で彼はほぼこういった：「ゲオルゲの詩は最高度に古典的で、完璧である。どんな作品にも逃れるわけにはいかない運命にさらされ、見知らぬ渦に呑みこまれてロンサルやクロプシュトックの名声と同じ道を辿っても、国民の精神がそれを淵から救い、それを保存し、実質でなくて性格を、形式でなくて傾向を尊ぶことであろう。」25才の若さで彼は、ゲオルゲを肯定しつつ、その上で更に批評を忘れなかったが、それはクライスに属さなかった彼の自由な姿勢に基づくものだといえよう：「相互に結びあわされた理論とか、芸術全体にわたる詩学とか、おきてのような規則書は死滅したものに等

しく、また、自分のためであれクライスのためであれ、一般的生活様式に自分をつめこもうとする人は、自らにわづかな間だけ人生のうわべを付与することができる。それに比して個人としての人間がその危機にあたりひき出してきた芸術規則は、ゲオルゲの活動の始めから生き生きした力を持つものであった。この意味においてのみゲオルゲは時代の主であり立法者であった。………ところで彼の秘教性とか演劇規則とかクライス組織とか小説への反論とかは、最も大きな弱点から存在統一を強要しているいかがわしい試みだ。………世界の形象が互いに寄りあい、無理強いしてユニフォームにならぬところに文化がある。」こういってボルヒェルトは文化の本質からゲオルゲのもつ不足したところを批判したのである。

彼の最大のゲオルゲ論は、7年後1909年に「第七の輪」について行ったもので、これは宵の明星 (Hesperus) という、ホーフマンスタール、シュレーダーと三人で出した雑誌に出た。これはゲオルゲクライスの「精神運動年鑑」に対抗して出たもので、グンドルフなどのホーフマンスタール・ボルヒェルト攻撃に一矢を報いたものである。ボルヒェルトはこのすぐれた論文で、「ドイツ詩の形式革命だったゲオルゲの詩が、今日内容の勝利に終わっている。文字通り反対になり、ごつごつして調和なく、グロテスクで精神的で、真実で怒気をおび、深くて何かにとらわれていて、この点で殆んど古風な古代ドイツ文学に近い」とのべた。彼はゲオルゲの形式理想主義脱脚とドイツ内容主義獲得に強く注目し、ゲオルゲが忠実な仕事を忘れて魔術の勝利におわらんとしているらしいと疑う。もっともすぐれているのは「王と琴弾き」の分析だ：「今や詩人は重厚なものを皿に投げこみ、悩みにみちた人生の重みをかけて芸術を昇化させる。………しかし芸術でだまされたと思ひこみ、そこからぬけ出て、相手の芸術を憎悪するようでは、もはや人生とはいえない。」彼によればこれは憎悪なのである。「ゲオルゲの世界観は楽天的に見えるけれども、暗い斗争に満ち、最も深いところで憎悪と結びつく。人生の複合的なものにまで浸透する力は彼には欠けている。それはまたこの時代にも欠けているのだ。あの大小のものの上に静かに見開かれたまなこ、神の世界が追創造される神にいたものがそれである。」それゆえにゲオルゲは過渡的詩人であり、力強い、世界に妥当する規模の過渡的大詩人である。「われわれドイツ人の中から、ゲオルゲの正しい継承者になる大詩人が生まれるまでには、長い年月が必要である。たとえわれらの人生の終らぬうちに未来の改革者が出ないにしても、われわれはここから一步も退いてはならない。」「この詩集では目覚めていた者が日夜眠っていたものに語りかけるようである。彼とめざめていた者の間には、全く疎遠な隔離的な空気が漂っている。………ゲオルゲは今日われわれの身身かにこない。われわれは新しい道を開拓し、その道が日毎彼から隔っていくのである。われわれ若い人にはこの距離をならして近づける仕事が残っている」、という風にボル

ヒェルトはいうのである。

ボルヒェルト全集（散文Ⅰ）にはその翌年の論文 *Intermezzo* がさらに収録されているが、これもまた、ゲオルゲクライスの「精神運動年鑑」に対する論争の一部である。この論争の直接動機は、ボルヒェルトのダンテ訳に対するグンドルフの無理解な批評にあった。当時世を騒がせるに足りたものは、この何の意義もない論争ではなく、ボルヒェルトのゲオルゲクライス批評にあったといわれる。ホーフマンスタールあてのゲオルゲの手紙に秘密の独裁という表現があるが、独裁的なものを、宗教的形而上的であるとともに、政治的、国家的でもある匂いをこめて、ヴォルターズなどが形成するのをゲオルゲが許しているではないか、というような問題を批評した点で、ボルヒェルトが一番早かったのである。ゲオルゲはこのイデーを国民のイデーとすりかえ社会のイデーにと飛躍させているのではないか？ このような疑いを大戦肯定者のボルヒェルトがなしたのには注目に値する。彼はさらにクライスの運動を自然主義に対する反動だとのべ、むしろ自然主義と同一視してしまい、二つは反立するどころか、同じアスファルトの上に生じ、同じコーヒ店に生じ、所詮大都市的なものだといった。：「この運動は自然主義と同じクラブで何度か自然主義と出会い、大都市の雌ねずみ層で世界のかすみの匂いを放っていたが、今やゲオルゲの豪胆な意志と重厚な世界悟性と弾力あるパリー風のセンスが彼らの上に立ち上り、ある者を鞍からひきづり下ろし、ある者を自分の方にひっぱり、自分の中に吸収したのである。」この文明の危機の時代にこんなクライスに入ってみても、ただ面をかぶっているだけで、実際の危機から脱出しうるはずがない。このようにのべるボルヒェルトのクライス批評は当時黙殺されたのだろうが、やはり先見の明があるようである。これに対してゲオルゲがどういったかはわからない。ともかくボルヒェルトのグンドルフ・ヴォルフスケール攻撃はひどく烈しく長々しいもので、多くのパロディーをこめて難解である。「君達が文芸を諦めたことをわれわれはとっくの昔から知っている。君達はもう何物もできぬし、何物も学べまい。……君達の小言ダンスにいくら相手がみつかったも、世界照応の弁舌は終わったも同然である。」

ここで注意しておくべきことであるが、ボルヒェルトはクライスを攻撃したがゲオルゲを攻撃したのではない。彼が1928年に「シュテファン・ゲオルゲの形姿」を発表し、ゲオルゲへの温い心を示しているのは尤もなことだ。彼のホーフマンスタールあての手紙にも、ゲオルゲについての重要な表現が多くみられる。ゲオルゲとホーフマンスタールの交渉がとだえた原因だった劇場の問題が、逆にボルヒェルトとホーフマンスタールをかたく結合していたことが書簡集からよく伺えるのであるが、晩年には、ゲオルゲとホーフマンスタールの間にあったのと同じ現象がボルヒェルトとホーフマンスタールのあいだにみられるようになってくる。ヴェルナー・クラフトに

よれば、ホーフマンスタール50才生誕日のボルヒェルトの手紙は、ホーフマンスタールの偉大さを青春時代の詩のみに限っているように見える。これはゲオルゲとそのクライスにくみするような考えではないか。このことはボルヒェルトが心からゲオルゲを愛していたという事実を証明しているとともに、彼が青春時代に劣らず偉大な詩人ホーフマンスタールを待ちのぞんでいたことを語るのである。しかも彼がゲオルゲを手放しにほめない点は、ゲオルゲの「心の年」が再び書かれず、再びそれ以上でありえなかったところにある。彼はいう：「歴史においては準備という状況のみが発展可能なのである。あらゆる真の開始は同時に始めにして終りである。それは追いこされ得ぬし、過ぎて尚生命を保てはしない。最初の思い切った行為がたった一回だけ思い切ってなされるだけである。すでに二回目は一回目の優位によって保護されているのみで、三回目は敢行した文学形態の終りなのである。」ゲオルゲの「心の年」は第一回目の敢行だが、「第七の輪」はすでに第二回目だと彼は思う。そこではもう敢行される何物も残らず、クライスはその垂流にすぎないのだ。それと同じく彼はホーフマンスタールの初回の敢行を期待したのであった。しかしホーフマンスタールの後年の散文やオペラ、ゲオルゲの後年の詩集や運動に対するこのような判断は少し芸術主義に片寄りすぎているといえよう。結局ホーフマンスターによりもゲオルゲにずっと近かったボルヒェルトは、常にゲオルゲを偉大なドイツ救済者とみなしていた：「もう存在していず、または再びは帰来してこない、一国民の詩人であること、それはいいかえるなら、この国民そのものであること、自己の中に国民そのものを積分していくことである。それは快よいロビンソンの感情なのだが、しばしば静寂の恐怖に満ちており、荒野に生死をかけた仕事をするごとく、日々新たに始め、敢行せねばならないものである（1920）。」ゲオルゲはこのような詩人であったが、残念ながら、教義として、即ち国民はここにあり、という教義として存在したのだ。従って彼はまだないこと、もうないことの間在る絶望としての詩人だったのである。「ゲオルゲは戦いの日々に生き、長らく戦場にあった。しかし彼を真に識る人は一人もなく、またさりとて自分の日の一日を彼の日に喜んでふさいでみない人もいなかった。というのも彼こそは、ドイツ人であるという概念に、ドイツ語の崇高極まりない改革と、ドイツ精神のための言語治療によって、新しいひびきを与えたのであるから（1928）。」

追加文献（学報5号、10号のものほかに）

Franz Schonauer : Stefan George in Selbstzeugnissen und Bilddokumenten 1960. (Rowohlt.)

Ernst Morwitz : Kommentar zu dem Werk Stefan Georges. 1960. (Helmut Küpper)

Kurt Hildebrandt : Das Werk Stefan Georges. 1960 (Ernst Hauswedell)

- Georg Peter Landsmann: Stefan George und sein Kreis. Eine Bibliographie. 1960 (Ernst Hauswedell)
- Berthold Vallentin : Gespräche mit Stefan George 1902—1931. 1961 (Castrvom Peregrini Presse)
- Hofmannsthal-Borchardt: Briefwechsel. 1954. (Fischer)
- Rudolf Borchardt: Prosa I. 1957. (Ernst Klett)
- |                                    |      |
|------------------------------------|------|
| Stefan Georges „Siebenter Ring“    | 1909 |
| Intermezzo                         | 1910 |
| Die Gestalt Stefan Georges         | 1928 |
| Ernst Bertram : Deutsche Gestalten | 1934 |
- Eugen Gottlob Winkler: Die Gestalt Stefan Georges in unserer Zeit. Über Stefan George. 1956  
Fischer-Bücherei. 351
- Rudolf K.Goldschmidt-Jentner : Stefan George (in „Vollender und Verwandler 1957.  
Fischer-Bücherei.182
- Thomas Mann an Ernst Bertram, Briefe aus den Jahren 1910—1955.1960. (Neske)